

10/16 列王記第一 18 章 36-40 節 「もし主が神であれば主に従え」

小池 宏明 牧師

ソロモン王が多くの偶像を受け入れたため南北分裂のさばきを受けた王国は、徐々に滅びに向かって行く。

アハブ王は、北イスラエル王国の 7 代目の王で、王妃のイゼベルと共に、激しい神の怒りを引き起こした。アハブとイゼベルは、バアル礼拝とアシェラ礼拝を取り入れて、それぞれの預言者たちを総勢 850 人も囲っていた。反対に、真の神、主の預言者たちを殺害した。

主なる神様はエリヤを用いて、アハブに 3 年に及ぶ飢饉が来るという裁きを告げさせた。その通りになったが、アハブは悔い改めることなく、エリヤの命を狙っていた。

*主の栄光が現れるための対決

飢饉になって三年目、エリヤに主のことばがあった。「アハブに会いに行け。わたしはこの地の上に雨を降らせよう。」(18:1) ここから、バアルと主なる神様と、どちらが本物かの対決が始まる。供え物に天から火を降らせて全焼にする神が本物なのだ。本来、そのような対決をしなくても答えは明らかである。しかし、どっち付かずなアハブ王やイスラエルの民が真の神の栄光を見る必要があった。会場はカルメル山。全国からそれぞれの預言者や民が集まって来た。エリヤは人々に迫った。「おまえたちは、いつまで、どっちつかずによろめいているのか。

もし【主】が神であれば、主に従い、もしバアルが神であれば、バアルに従え。」

(18:21) しかし、集まっている民は、一言も答えなかった。主なる神様への信仰を失っている民の姿が明らかになった。実際の対決では、バアルの預言者たちが必死に願っても、供え物に火が降ることはなかった。一方エリヤが静かに祈り求めると、天から供え物に火が降って焼き尽くした。民は、「主こそ神です」と連呼し、主に立ち返った。この後、主は雨を降らせて下さった。

*主に立ち返る

私たちは、多様性の大切さが叫ばれている世界に住んでいる。主なる神様が創られた世界は千差万別、一人ひとりが神のかたちとして尊重されることが大切だ。しかし、人間が自分の都合の良いように作った多くの神々を真実の神とすることはできない。私たちは、聖書が啓示している主なる神様、救い主イエス・キリストこそ、真に力ある実在の神であることを知っているからだ。もし、自分の中に、どっち付かずな思いや迷いがあるならば、聖書の御ことばに聴き続け、真の主なる神様の栄光を見る体験へと導かれるように祈り求めよう。